

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

自分らしさを表現し誰もが輝く社会の実現に向けて：
LGBTに対する差別や偏見の無い社会を目指して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 映子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/7867

自分らしさを表現し誰もが輝く社会の実現に向けて ～LGBTに対する差別や偏見の無い社会を目指して～

外国語学部教授 熊谷 映子

はじめに

私は本学において「ホスピタリティ」という講義を担当しています。

労働がロボットに取って代わるなどAI化が進み、コミュニケーションや癒しささえもAIに頼る時代になりつつある今、「ホスピタリティ」の講義を通して、「人間である自分」の価値を再認識し、自己肯定感を高め自分の個性を自信を持って表現しながら、自ら考え行動できる強い大人になって欲しいとの思いで講義を進めています。

本学は「外国語大学」ということもあり、語学を活かし人とかかわる仕事で活躍したい、国籍や人種を超えた世界で活躍したい、と将来に夢を抱く学生が多く、そんな彼らによりグローバルな視点を身に付けてほしいこと、また自分の個性や魅力を認めると同時に、相手の個性を魅力として認め受け入れてほしいことから、講義では「障がい」や「性的マイノリティ (LGBT)」など、「多様性=ダイバーシティ」について触れる機会を設けています。

授業においては、双方向コミュニケーションの一助にもなり、学生の皆さんがご自身の考えや意見を自由に記入できるよう、オリジナルの授業外学修用紙を作成し、「自由記入欄」を設けています。

授業への導入として、第一回目の授業であるオリエンテーションでは「多様性=ジェンダー」への理解を深めるための工夫の一つとして、「性別については、ご自身の決めた性を前提に講義を受けてください」とお話ししています。

2018年度春学期のオリエンテーションを終えた後、この自由記入欄に、ご自身の性指向=LGBT当事者であることについて記入して下さった方が数名いらっしゃいました。

また30回の講義を通して、どのクラスからもLGBTに関しての思い、経験

自分らしさを表現し誰もが輝く社会の実現に向けて～LGBTに対する差別や偏見の無い社会を目指して～

を綴ってくださる方が何人もいらっしゃいました。

皆さんが記入してくださった内容は、ときにクラスを超えて共有し合い、皆さんと一緒に考えてもらう時間を設けました。そうすることで、さらに考え、自分たちはどう在るべきかを考えてくれ、その姿に皆さんの成長を感じることが出来ました。

LGBTへの理解

私は航空会社から本学に出向している実務家教員です。私が航空会社に入社した1985年当時から、いわゆるLGBTを自認する同僚が居り、同じ職場でともに汗を流してきました。また、接客業であったため、お客さまとしてお迎えすることも日常の光景でした。5年ほど前からグループ社員全員を対象にLGBT教育が実施されたこともあり、LGBTについて揶揄することもなく、偏見や差別意識の無い環境で長年過ごしてきました。また自身をALLY（性的少数者を理解し支援する立場を明確にしている人＝ALLIANCE 同盟・支援）としてPCにステッカーを貼るなどして意思表示をしています。

しかし、授業で学生の皆さんと接するなかで、現代の中・高などの教育の現場でも、LGBTについて正しく認識されていないケースや発言が有ったことを知りました。LGBTについての教育は現在のところ義務化されていませんが、何かしらの方法での教育がなされたケースもあれば、揶揄の対象と捉えられているケースもあり、若い世代のLGBTに対する認識はさまざまでした。

このように2018年度春学期開始時には、LGBTについて、何かしら教育を受けた経験がある学生、「身近にLGBTの友人がいる」学生から、「LGBTということば自体を聞いたことが無い」という学生まで幅広く存在しました。

その後、2018年7月、国会議員の「LGBTは生産性が無い」との発言や、著名な経済学者がLGBTであることを公表したこと、またLGBTを自認するタレントがテレビで連日活躍していることもあり、今年度の春学期と秋学期を比べても、学生の皆さんのLGBTに対する認識や関心は確実に進んでいると実感しています。

教育の現場では、2018年3月、文部科学省による教科書検定の結果、中学校の道徳の教科書で8社中4社にLGBTについての記載があることが明らかになりました。ようやく義務教育においてLGBTが取り上げられるようになったことは大きな前進であると言えます。しかし、LGBTについて記載のない教科書を選択した中学校ではLGBTについて正しく学ぶ機会がなく、LGBTに対して正しい認識を持たない若者がまだまだたくさん存在していくことになります。

膨大な情報が行きかう中でLGBTの認知度は高まりつつありますが、教育や環境によって理解度にはまだまだ差が存在し続けることを知っておかなければなりません。

私たちは大丈夫？

このようにLGBTについて学ぶ機会が無いままの大人が存在し続けることになっていきますが、LGBTということばがまだ存在せず、一切の教育を受けてこなかった、私を含めた中高年齢層は、企業や組織においてもLGBT教育は義務ではないため、LGBTは自分にとって遠い存在であり、まだまだ揶揄の対象として捉えている現実があると感じます。

NGO（非営利の国際人権組織）であるヒューマン・ライツ・ウォッチ（「出る杭は打たれる＝日本の学校におけるLGBT生徒へのいじめと排除」2016年5月全84ページ）には、学校の先生からLGBTに対する差別的発言や対応を受けた例が多く紹介されています。

私の受講生からも、中・高含め過去の学校生活において実際に経験したケースに関する声が寄せられました。

- ・LGBTを揶揄する発言が大人から発せられ、不愉快な気持ちになった
- ・「ボーイッシュだね」「男か女かわからない」と言われた
- ・健康診断の際に男女のみで分けられるのが苦痛

差別や偏見に対する正しい認識が欠けている場合、私自身、知らないうち

自分らしさを表現し誰もが輝く社会の実現に向けて～LGBTに対する差別や偏見の無い社会を目指して～
に学生を傷つけているかもしれないと不安を覚えました。

私たち大人の反省

今秋学期は各授業において3回にわたり、喫煙のルールやタバコのポイ捨てに関し、学生の皆さんに注意喚起したのは記憶に新しいところです。

なぜ「ポイ捨て」や「歩きたばこ」、「吸いたいところで吸う」のでしょうか。これらのことをいったい誰から学んだのでしょうか。それは私たち大人からなのです。子供の手を引きながら赤信号の横断歩道を渡る大人など、私たち大人が何気なく取っている行動が、幼い彼らの目に焼き付き、次世代へと受け継がれてしまうのです。

差別や偏見も同じと考えます。私たち大人の伝え方によって、刷り込まれ方が決まってしまうます。

LGBTに対する感情はもちろん人それぞれですが、差別や偏見はあってはならないことは誰もが理解しています。相手を傷つけたり、差別や偏見と取られるような発言はあってはならないのです。何事においても言えることですが、「理解できない」「興味が無い」などと関心を持たず自身から情報を得ようとしないままでいれば、いつの間にか時代に取り残され、常識からかけ離れた人間になってしまいます。自分の価値観を変えることは容易ではありませんが、自分の価値観が時代に即しているのか、「自分は大丈夫」と思う前に、自分自身を常に謙虚に見つめることを忘れないようにしたいと思っています。

講義での大切な経験

私が担当している短大のクラスでの大切な経験を共有したいと思います。

私の講義では終盤に「演習」の時間を設けています。この演習は、「今までの授業で学んだこと（盛り込むべき項目・内容は指定済み）を生かし、会社、またはお店を企画」し、クラス全員の前でプレゼンテーションを行う、というものです。

時間の制約上、プレゼンテーションしていただく人数に限りがあるため、

自分らしさを表現し誰もが輝く社会の実現に向けて～LGBTに対する差別や偏見の無い社会を目指して～

まずは立候補する方を募りました。その際、手は挙げないものの、私に向けられている強い視線に気づきました。その視線の主は、授業外学修でご自身がLGBTであることを書いてくださったAさんでした。私はAさんを指名することが良いことなのか一瞬ためらいましたが、「Aさん、いかがですか？皆さんの前でやってみますか？」と、NOと言える幅をもたせて声を掛けました。するとAさんは「はい」と言って教卓に進み出てくださいました。私はAさんに皆の前でのカミングアウトを望んでいたのではありませんが、Aさんは、ご自身の心の性につき最初に話してくださいました。次にご自身が企画した「性別・年齢関係なく化粧品を自由に選べるお店」について、笑顔とともに堂々と発表してくださいました。

同じ教室で授業を受ける仲間同士、お互いにどのくらい関心があり友情があるのか、学生の皆さんと同じ立場にない私には測ることは出来ませんが、約100名の聴衆を前に自分を素直に表現しようかためらうAさんの背中を押したのは、「クラスの仲間の理解」であり、授業外学修に寄せられた「LGBTは否定されていない」、「受け入れられている」という仲間の思いがAさんに伝わったからだと思っています。

このクラスには、ご自身がLGBT当事者であることを授業外学修用紙に書いてくださっている方がAさんのほかにもいらっしゃいました。「LGBTは自分の身近に存在し、当事者は苦しい思いをしているかもしれない」、「では自分たちはどう在るべき？」など、Aさんの発表が、クラスに居たすべての仲間に、差別や偏見について考えること、勇気や正義、思いやりなど多くのことをもたらしてくれたと思っています。

短大のクラスはほとんどが未成年で、時にいねむり、おしゃべりも見受けられるなど子供っぽさを感じることもあるクラスでしたが、誰もが顔を上げAさんの話を真剣に聞いていた姿が印象的であり、皆さんがとても頼もしく思えました。

私自身、発表してくださったAさんの勇気と、純粋な心で相手を受け入れるクラスの仲間の姿に心を打たれました。

後日Aさんは私にお手紙をくださいました。Aさんのご了承を得たうえで、

自分らしさを表現し誰もが輝く社会の実現に向けて～LGBTに対する差別や偏見の無い社会を目指して～
お手紙の一部を紹介させていただきます。(イタリック体部分)

私の話した内容で、皆さんが何か感じるものを得られたのなら、とても嬉しく思います。

私はつい最近まで、自分がこの世に生を受けたことにずっと疑問を抱いており、生まれてきたことを後悔さえしていました。それはこの18年間の中で、度重なるいじめ、辛い思い、心の性、その他数多くの困難を一人で受け止め、苦しみ、乗り越えて来なければならなかったからです。私は人間不信になり、この18年の中で相談相手は誰一人としていませんでした。次第にこの先に未来が見えなくなり、人生を変えたいと思いました。そうして私がセカンドステージに選んだのがここ、関西外大でした。

私がまずやりたいと思ったことは、自身のセクシャリティを隠さないということ、そして、他の人が味わったことがない経験をしてきた自身の存在を誇りに思うこと。

私は誰かに自身のことを聞いてもらうことで、これまでの苦しみから解放され心が軽くなり、「自分を偽らないこと」「自分を誇りに思うこと」も実現できるのではないかと考えました。しかし、いつどのような行動を取ればこれが実現できるのか、私にはずっと分からずにいました。そんな中、授業で「企業やお店を自由に企画」する「演習」があると聞き、私はこれをどうにか利用できないかと考えました。

春学期終盤に差し掛かり講義は「演習」の回を迎え、やがて全体発表の時間になりました。しかし、自ら手を挙げて発表しようにも私はなかなか勇気が出せずにいました。すると先生から声がかかったのです。あの時声を掛けられなければ、もしかすると私は発表できず、ずっと後悔していたかもしれません。この経験から、私は勇気を出すことの大切さを学ぶことができました。また大きな一歩を踏み出すこともできました。ずっと心に抱えていた重たいものを軽くすることが出来ました。

このお手紙を読んで、あらためて当事者の苦悩がどれほどなのかを痛感し

自分らしさを表現し誰もが輝く社会の実現に向けて～LGBTに対する差別や偏見の無い社会を目指して～

ました。秋学期を終えた期末試験期間中にも、Aさんは私を見つけて声を掛けてくださいました。2019年1月現在、Aさんは卒業後10年の人生設計もしっかりと立て、目標に向かってご自身が輝くステージを切り拓こうと努力しています。そしてAさんの笑顔を見るたびに私自身が勇気づけられています。

講義を通して寄せられた学生の皆さんからの声、そして学び

授業外学修の自由記入欄に、「自分の子供の性指向は生まれた時には分からないので、男女どちらにも通用する名前を付けた」という、高校時代の先生の話を紹介してくれた方も居ました。

「カミングアウトということば自体がなくなる日が来れば良い」との意見、また『『バイセクシャルかも』と友人に打ち明けた際『恋愛が二倍楽しめるね』と返してくれた」と書いてくださった方もいらっしゃいました。はたして私にこのように瞬時にポジティブなことばを返すことが出来たか、と自分の未熟さを反省することも有りました。「学生の皆さんと共に育つ＝共育」であり、若い皆さんから多くのことを学んでいます。

広がる選択肢

私の出向元である航空会社では、TOKYO2020に向け制服が一新されます。新制服はジェンダーの多様性に配慮したデザインが採用されます。女子生徒の制服にスラックスを取り入れる中学・高校も少しずつ出てきているなど、LGBT当事者のみならず誰にとっても選択肢の幅が広がりつつあります。

現在、様々な書類に性別を記す欄が設けられています。米国ではMale・Female欄に加えX欄または空欄が設けられているケースもあります。性別は58の、もしくは70の選択肢があるとも言われている現在、本当にすべての場面において性別を知る必要があるのか今一度考えなければなりません。

遠い存在ではないLGBT

電通ダイバーシティ・ラボ (<http://www.dentsu.co.jp>ddl>) が69,989名を対象に2015年に実施した全国調査によれば、LGBT層に該当する人は7.6%と

自分らしさを表現し誰もが輝く社会の実現に向けて～LGBTに対する差別や偏見の無い社会を目指して～

算出されており、これは13人にひとりがLGBTであるという数字です。また当該調査よりも3年前となる2012年に実施した同調査ではLGBT層は5.2%であり、3年で2.4%増加しています。増加理由として、「調査手法の変更、社会環境の変化や関連情報の増大による該当者の自己認識への影響の変化」と分析されています。今後、環境やLGBTに関する周囲の理解が進めば、特に匿名のアンケートにおいては、LGBT当事者が自身の性指向を公表する割合は高くなることが予想されます。またLGBTに対する理解が進み、偏見や差別意識がなくなり、性指向の後天的変化にも抵抗がなくなることを加味すれば、LGBT層の人口に占める割合は、血液型AB型9%、左利き11%に並ぶ割合に迫ることが考えられます。

これだけの割合でLGBTが存在するにも関わらず、自分らしさを発揮できずに苦しんでいる学生が、私たちの受講生の中にも少なからず存在しているということを正しく認識する必要があると考えます。

カミングアウト（公表）とアウトティング（本人の了承無く、LGBT等の性的指向を第三者に公言すること）

NHKが2015年にLGBT当事者を対象に実施したアンケートによると (<http://www.nhk.or.jp/d-navi/link/lgbt/>) カミングアウトした相手は「友人」が最も多く（約80%）、親・きょうだい・配偶者などの家族には50%程度、職場の仲間には40%程度と、身近な人にはカミングアウトできていないという結果が出ています。

過去に、アウトティングされたことにより、精神的に不安定となった大学生が自殺してしまった痛ましいケースがありました。またLGBTであることを打ち明けられた側が、その事実を受け止められずに第三者にアウトティングしてしまったという、悪意の無いケースもあります。このような不幸なケースを繰り返さないためにも、自分に大切なことを打ち明けてくれたという相手の思いをしっかりと受け止める必要があることなども含め、LGBTについて理解し、正しい知識や認識を持ち、LGBTが決して特殊なものでは無いことを伝えていかなければなりません。

企業や組織の発展、人財確保の観点から

2018年6月にパナソニック取締役役に就任した英国人ローレンス・ベイツ氏は、ITmediaビジネスオンラインのインタビューで次のように語っています。パナソニック入りを決断した理由として、「仕事のやりがいが一番であったが、性的マイノリティを含め、ダイバーシティを尊重する会社であったことも大きなポイントであった」と述べています。<http://www.itmedia.co.jp/buisiness/articles/1812/23/news011.html>）。パナソニックは、性別や年齢、人種などと同じく、性的マイノリティに対する差別的発言や性差別的行為を禁止し、ダイバーシティ重視を明確に打ち出しています。

彼はこのインタビューの中で、「LGBTへの差別は日本経済の損失」であるとも述べています。

このように、人財確保という観点からも、国や企業、さまざまな組織においてLGBTに関する具体的な取り組みや制度、環境を整備する必要があると言えます。

最後に

差別や偏見が無く、皆が自身の存在意義を感じながら生き生きと人生を歩むことのできる社会が実現出来たら、と誰もが思っているはずです。LGBTは誰にとっても身近なテーマです。その実現のためには、一人ひとりの行動に意味があることを理解し、大人として何を伝えていかなければならないのか、より良い社会を次の世代に継承していくために、「今日から、今からできること」を一つでも実行していきたいと思います。皆さんとともに。

Aさんの勇気に私も何か報いたい、どんなに小さなことでも良いから自分にできることを何かしなければならぬと強く思い、私なりに人権について考えました。また本学における大切な体験を共有させていただきたいと思ったのが、拙いながらもこのエッセイの投稿のきっかけとなりました。私の小

自分らしさを表現し誰もが輝く社会の実現に向けて～LGBTに対する差別や偏見の無い社会を目指して～
さな行動で世界が1ミリでも変われば良いな、と思っています。

以上